

平成30年度効績章表彰について

2018年10月15日
公益財団法人鉄道総合技術研究所

公益財団法人鉄道総合技術研究所（以下、鉄道総研）は、10月15日に、東京都立川市において、勤続年数満25年を称える職員への効績章の表彰式を下記のとおり開催しましたので、お知らせいたします。

記

1. 日 時 平成30年10月15日（月） 11:00～12:00
2. 場 所 パレスホテル立川（東京都立川市）
3. 受章者 27名
4. 列席者 理事長 熊谷則道、専務理事 澤井潔、専務理事 渡辺郁夫、
理事 芦谷公稔、理事 久保俊一、理事 潮崎俊也、監事 稲見光俊、
企画室長、コンプライアンス推進室長、経理部長、情報管理部長、
国際業務部長、研究開発推進部長、JR部長、事業推進部長 他

理事長 熊谷則道が表彰式で受章者に表彰状を手渡した後、永年勤続の労をねぎらうとともに、これからも引き続き活躍をしていただきたいとの祝辞を述べました。理事長の祝辞を受け、受章者を代表して車両構造技術研究部 走り装置研究室 主任研究員 城取岳夫が答辞を述べました。



写真 表彰状を手渡す熊谷理事長と受け取る受章者

【理事長祝辞要約】

勤続25年を称える効績章を受章されましたこと、まことにめでたうございます。皆さんが入社された平成5年は鉄道総研になって6回目の採用でありました。JR会社等は民営化後に経営を安定させるために様々な施策を打ち出した時期です。このような時期に新生JRに加わり、鉄道をよくしようという気概をもって入社されたことと思います。平成5年は国内ではバブル経済の終了、欧州では経済等の統一を図る欧州委員会が発足するなど、旧来のレジームをくつがえす事象が起きたダイナミックな時期でした。国内鉄道では、山陽新幹線に「300系のぞみ」の運行が開始(270km/h運転)され、試験車両STAR21, WIN350による新幹線の高速化のためのチャレンジがすすみました。特に鉄道総研の活動で、超電導浮上式鉄道の技術開発では山梨実験線の建設が2年目に入り、さらに新幹線の高速化の研究開発に拍車がかかった時期です。皆さんも先輩たちの指導を受けつつ精力的にこれらに参画してもらいました。

皆さんが勤務された25年間は公益財団法人として設立32周年を迎える鉄道総研の歩みと同じ時を刻んできています。数年は先輩たちの背中を見ながら、またその後は自発的な意思によって鉄道の技術課題の探索や課題解決のための研究の手法を1つ1つ積み重ねて研究基盤を着実に築かれてきたと思います。

本日25年目の年を1つの通過点とし、鉄道をさらに良くすることや鉄道の価値を高めるための活動にまい進して頂きたいと思います。御承知のように、鉄道総研は「鉄道の発展と豊かな社会の実現に貢献する」との活動のビジョンを設定し、ダイナミックな研究開発の推進を柱としています。ダイナミックな研究開発とは鉄道総研の総力を挙げることで、すなわち「分野横断的に研究者が集合して総合力を発揮」、「蓄積した実験データと知見を活用」、「独創性のある特徴的実験設備を活用」、「変動するニーズをとらえるマーケティングを実施」して、実用化を目指すことです。引き続き研究開発活動を通じて鉄道事業者をはじめとする社会から信頼を得ることに邁進していきたいと思っております。

幅広い年代層の中で、皆さん方は若い人たちから背中を見られる立場になっています。活力ある次の世代を担う職員に、ぜひ皆さんの蓄積された基盤を伝えてください。研究開発の活力は、鉄道システムへの好奇心から生まれるのだと思います。これからも、鉄道総研の次の30年に向けた目標の達成のために皆さんの好奇心と創造力を発揮されることを大いに期待いたします。

ご列席されているご家族、また今回ご列席できなかったご家族の皆さまに、永年勤続のお祝いとお礼を申しますとともに皆様のご健康を祈念いたしまして、私の祝辞とさせていただきます。



写真 祝辞を述べる熊谷理事長

【受章者代表答辞要約】

本日は、勤続 25 周年を迎えました私ども 27 名に効績章を賜り、誠にありがとうございました。

私どもは、平成 5 年の入社です。いわゆる平成バブル景気にあり、国鉄分割・民営化を経て、財団法人として独立して歩み出した 8 年目の年に当たります。当時の鉄道総研では、寄附行為の理念に基づいた新たな運営基盤を確立するべく、自主・自立した活力のある研究組織づくりに、役員、職員が一丸となって取り組んでいるところでした。

この 25 年の間、鉄道総研は、新幹線の速度向上、メンテナンス技術の革新、信号・情報技術の高度化、ハイブリッド車両の開発による省エネルギー化、脱線・衝突対策、地震対策などに取り組み、鉄道の安全性、信頼性、利便性の向上に貢献してきました。この中で、私どもの努力が、安全・安定輸送に、いくらかの貢献をなし得てきたことは、大きな喜びであり、誇りでもあります。一方で昨今、入社時には、予想もつかなかったことが起きています。鉄道は、国内では大規模地震、火山噴火、豪雨、突風といった自然災害、少子高齢化、インフラの老朽化など、様々な課題に直面しています。一方、海外では、インドを始め多くの国が鉄道整備を積極的に検討・推進しており、ハイレベルでの国際協力を要請されています。また、急速にデジタル革命が進み、ネットワーク、ビッグデータ、I o T、人工知能などの技術が鉄道界や日本の社会をいやが上にも飲み込もうとしています。

鉄道総研は、これらの課題や国際化に対する鉄道界や社会からの負託に、公益財団法人として応えるため、革新的な技術の創出を求められています。この負託にいち早く対応するため、ダイナミックな研究活動を行い、日本の鉄道技術の先端を担い、世界の鉄道をリードしていく必要があります。さらに、事故や災害の原因究明やその対策を提案するために、鉄道全般に及ぶ深い知見を蓄積し、技術的良識に基づく中立的な活動を行うことも必要です。私たちも、これらの活動を具体化するべく、25 年積み上げてきた個々の能力や個性を発揮し、総合力を活かし、より困難な課題に積極的に取り組む必要があると考えております。本日の効績章を機に、私たちに課せられた使命を今一度肝に銘じ、鉄道総合技術研究所の一層の発展と社会への貢献に向けて、今後とも業務に精励することを誓い、御礼の言葉とさせていただきます。



写真 答辞を述べる 城取主任研究員